

残された家族の思い、 その軌跡を見つめたルポルタージュ。

facebookでも情報を公開しています。
「facebook 大西輔夫」で検索するか、下のアド
レス又は右のQRコードからアクセスできます。
[fb.com/nobucyann/](https://www.facebook.com/nobucyann/)
・映画の上映で得た売上げの50%が「東松
島市東日本大震災義援金」か「小野駅前応急仮
設住宅で製作されている『おのくん』のいづれかに寄付されます。



2011年3月11日に発生した東日本大震災以降、東北沿岸部を取
材する日々が今も続いている。

僕らが生きている時代は、これで終わってしまうかもしれない
とまで、現場は絶望感に包まれていたことを思い出す。命を亡く
した2万人を思う日が続いた。現地で見た安置所のご遺体を今
も思い出すことがある。「無念だったと思います」と言いながら
自衛隊員が涙を拭う姿もあった。

自分に置き換えられない現実に取り添うことが、どれほど難し
いことなのか、それを肌で感じてきた。相手の言葉を受け止める
だけが精一杯だった。どうしてもこの記憶や空気感を写真や映
像にとどめておきたかった。

僕はカメラマンという記録者だからだ。

ドキュメンタリー映画を作ろうと思ったのは、震災から2年ほ
ど経っていたころだ。がれきの分別をするおばさんの言葉が一
つのきっかけだった。その現場は、塵や埃が海風でつねに舞い上
がっていた。目の前のがれきの山は、自宅かもしれない、いや、友
だちの家の柱かもしれない。しかし今の生活を少しずつ立て直
していくために、目の前の仕事を淡々とこなしている。

「ここを撮って！この現状を知って欲しい！」

背中を押されたように、僕はビデオカメラを回し始めた。そこ
には真剣な眼差しの中に、笑顔があった。

「でもね、生活用品が出てくるだけで、いろいろ考えてしまって、
マスクの中は、涙でくもるときがあるのよ。でも続けるの、この
仕事を！」

東北の人たちのひたむきな姿の中に、生きようとする根強さを
教えられた。そして、言葉を聞かされる覚悟と、聞いた責任があ
ると思うようになった。



「まあ、どうぞ」と通された仮設住宅の一室には、家族の遺影写真
が目の中に飛び込み、空気が止まったような雰囲気包まれた。
そして全身に力が入った。

命日は揃って3月11日。これが東北沿岸部の現実だった。

街の復興が進み、明るい話題が多く飛び交うようになってから、
人の表情も明るくなった。しかし、そればかりが東北の話題では
ないことは、玄関の内側を見てわかっていた。外で明るく振る舞
い、内で静かに酒を飲む。みんな心の内は一緒だった。
そこにピントを合わせたかった。玄関の内側は、心の内面と似て
いる。軌跡をたどるように残された家族は、今日も玄関の外へ元
気良く出掛けていくのだった。

